

大畫家の畫室は、常に一の個人展覽會會場とも云へる。人によつては、仕事場と客を導く所謂畫室と二つ持つてゐる。仕事場は目立たぬ色で全部塗つて、室内も簡単な仕掛になつてゐる。畫きかけの繪や參考品はピンドで壁に貼つてあるが、客を導く畫室は、粧飾も華美ではないが、金がかゝつてゐる、立派な大きな畫架には出來上つたばかりの畫が置いてある、其人一代の傑作で、手許にあるものは皆夫々額縁に入つて程よく並んでゐる、此室に入れば、少くとも其人の數年間の製作を一時に見ることが出来るのである。

いま東京で、西洋畫の個人展覽會を催ふすに足るべき會場は、ひとり新橋の吾樂殿あるのみである、青年會館、帝國ホテル、交詢社等で、曾て開かれたこともあつたが、何れも壁が白かつたり、光線が悪かつたり、陳列に不便であつたりして、理想的でない。吾樂殿も少し狭いが、小品の陳列には適してゐやう。

個人展覽會は、其繪の作者の知人又は、其名を知てゐる人が多く來るので、觀者と作者との親しみがある。作者自身も、其作品が多數の中に混つてゐると異ふから、其製作には一層責任を感じず譯である。今や此種の會が、東京で續々開かるゝ傾向があるが、進むでは、地方にも及ぼして、美術趣味普及の一の手段に用ひたいものである。

談 片

アメリカの都市には、何處でもアートストアといふのがあつて、常には繪を陳列して賣つてゐる。額縁屋を兼業してゐる。また繪の材料一切、畫帖や繪葉書のやうなもの迄も賣つてゐるものもある。そして階上は幾區劃に仕切つて繪が陳列されており、其繪は取除けると展覽會場になるやうになつてゐる。東京にもこのやうな店が二三軒欲しいものだ。